

2012.3.31

# Annual Report F.Y. 2012 International Institute for Okinawan Studies

## 2012年度 国際沖縄研究所 所報

### 2012年度『所報』発行によせて

国際沖縄研究所所長 我部政明

国際沖縄研究所は、沖縄研究のための研究拠点だと思われるようです。なぜならば、英語での表記でInternational Institute "for Okinawan Studies"と名打っているからです。沖縄研究といえば、明治期に日本に名実とも併合された近代沖縄に残る「沖縄らしさ」(Okinawan あるはOkinawannessと呼ぶのだろうか)の再発見と再評価をおこなう学術的な研究分野として知られているのではないのでしょうか。

しかし、当研究所で進められている研究は、対象となる焦点が沖縄あるいは琉球という空間へ集まる沖縄(琉球)研究とは真逆な方向に立っています。これらの研究は沖縄を知ることが目的ではありません。沖縄についての知的蓄積から、世界の各地で起きている様々な政治的、経済的、社会的、文化的な現象を解き明かすことを目的としています。

当然のこととして、沖縄の空間で生じてきた、あるいは起きている様々な現象への理解を抜きにしては成り立ちません。何よりも、これらの研究の水平線には、沖縄という空間を通じて世界の人々とつながることを明確な目標が存在しています。人間の知的営みを通じて、共通の課題へ取り組むことです。こうした研究所での成果が生まれつつあります。沖縄から世界を眺めたことから導かれる知的資本(intellectual capitals)が、ここにあるのです。(国際政治学)

#### 目次:

活動概要	1
新しい島嶼学	2
沖縄ジェンダー学	3
H24年度中期計画達成PJ	4
2012年度出版物	5
組織図	7
研究所規則および規定	8

## 2012年度活動概要

本年度の国際沖縄研究所としての活動は、平成23年度にスタートした2件の文部科学省特別経費プロジェクト「新しい島嶼学の創造—日本と東アジア・オセアニア圏を結ぶ基点としての琉球弧」「沖縄におけるジェンダー学の理論化と学術的実践—沖縄ジェンダー学の創出」を、国内外の研究機関や研究者との学術連携を拡充・深化しながら推進すると同時に、昨年度に引き続き、本学中期目標・中期計画達成プロジェクト経費による学内競争的資金を獲得して「人文・社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者および地域リーダーの育成・研究推進プロジェクト」のもとで、若手研究者とベテラン研究者が互いに切磋琢磨する場を設け、新たな琉球・沖縄研究の展望を開く活動を進めてきた。

これら3つの研究事業のもとで、「IIOSレクチャーシリーズ」と銘打った講演会を5回、公開シンポジウム・ワークショップを9回、国際シンポジウム・ワークショップを5回実施し、それぞれの事業目標に向かって活発な研究活動を展開した。年度末には、各事業の成果物としての年次報告書を作成し、プロジェクトに関わる国内外の研究者や関係各機関に配布した。



のべ20回にわたる講演会、シンポジウム等が開催された。

また、研究所発足以来、継続的に発行している国際ジャーナル *International Journal of Okinawan Studies* のvol.5およびvol.6を順調に刊行するとともに、昨年度より発行を開始した紀要「国際琉球沖縄論集」第2巻を3月に刊行するなど、対外的な認知度や評価を向上させることに努めてきた。

今後は、これまでに培ってきた国際性・学際性を活かしながら、新たな研究プロジェクトを企画するなど、さらなる研究の充実を目指すとともに、そのために必要な組織の拡充を図っていく。

## 「新しい島嶼学の創出」

### 島嶼の不利性を 優位性と捉えなおす

#### 本年度の重要課題

本年度は、「琉球・沖縄比較研究」および「文化・環境・社会融合研究」に重点を置き、下記テーマに関する研究活動を展開した。

- 世界における島嶼研究の現状・課題・展望
- 社会疫学の立場から考えるソーシャル・キャピタルと健康
- 地域主導とグローバリゼーションの観点から見る現代沖縄の展望
- 島嶼学・ジェンダー学の結節点としての沖縄・ハワイ
  - 太平洋島嶼地域の国際関係と発展
  - 沖縄およびハワイのエネルギー・環境問題
- 多様性が開く“島”の可能性—琉球の生物・言語・文化
- 太平洋島嶼地域における持続可能な漁業—コミュニティと女性の視点から
- 島嶼における言語復興（沖縄・グアム・ハワイ・アイヌ・ウェールズ）



国際シンポジウム「島嶼における言語復興」の様子

#### 活動概要

本事業は、沖縄および沖縄と関連の深い太平洋島嶼地域の持続的発展について、「琉球・沖縄比較研究」「文化・環境・社会融合研究」「超領域研究」の3つの研究フレームの下で学際的研究を展開してきた。昨年度に続き平成24年度も、講演会やシンポジウム、ワークショップなどの研究集會に国内外の島嶼関連分野の研究者を招き、沖縄の研究者との間で島嶼地域に共通する重要課題について活発な議論が行われた。



国際セミナー「太平洋島嶼地域における持続可能な漁業」の様子

#### 目標と成果

本年度は計7回の研究集會を通して、現代の島嶼地域が抱える様々な問題や課題、そして問題解決に向けた最新の知見を得ることができた。たとえば、健康情報へのアクセスや体調の相互チェック機能が働くなど家族や地域の人々の絆（ソーシャル・キャピタル）が健康維持・改善に効果的に働くという調査結果や、持続的漁業を目指した資源管理にコミュニティの力を活用するというアイデアは、大都市では難しい、小さな島嶼社会であるからこそ可能な密接な人間関係を活用した。環海性や遠隔性という不利性を自然や文化の多様性の源と理解し、その多様性を優位性と捉えてその維持と向上を図るという考え方もまた、島嶼地域の大きな可能性を示唆するものである。このように、島嶼地域の不利性を優位性と捉えなおすという視座に立った提言が得られたことは、「新しい島嶼学の創造」に向けた本年度の大きな成果であった。

#### ハワイ大学沖縄研究センターとの学術交流

国内外の研究者・研究機関との学術交流の中でも特にハワイ大学沖縄研究センターとの共催で実施した合同シンポジウムは、IIOSのもう一つの研究事業「沖縄ジェンダー学の創出」との合同事業でもあり、多くの共通課題を抱える沖縄とハワイの研究者が一堂に会して多様なテーマについて議論を交わしたことは今後の共同研究の展開に大きな可能性を見出すことのできる貴重な機会となった。



ハワイ大学との合同シンポジウム

## 「沖縄ジェンダー学の創出」

### 既存分野の再考 多角的視野からの考察

#### ジェンダー意識を「表象」から探る

本年度の重点テーマとなる「沖縄におけるジェンダーの表象」を追究するうえで意識した問いは、パフォーマティブな「ジェンダー」が、沖縄の歴史や社会、そして文化の中でどのようなメタファーとして定着し、機能し、沖縄におけるジェンダー観を形成してきたのかということである。

その問いに沿って、本年度も国内外から多様なゲストスピーカーを迎え、レクチャーやシンポジウムを開催した。国際シンポジウムとしては、まず平成24年10月に沖縄県立美術館とのコラボレーションで開催した国際ワークショップでは、フィリピン人女性美術家、日系アメリカ人小説家、奄美系画家、中国系アメリカ文学研究者を迎え、「他者、ディアスポラ、女性のアートと表現—共同体の再構築へ向けて—」と題した国際ワークショップを開催した。近代以降の西洋中心の白人中心の思考枠の外部で、それぞれの出自と社会的・歴史的コンテキストにコミットした表現を实践する表現者たちが交わす言葉は、沖縄のジェンダー観を想像するうえでも示唆的だった。

さらに、平成24年11月に、ハワイ大学の沖縄研究センターおよびハワイアンスタディーズの研究者を迎えて行った琉球大学・ハワイ大学国際合同シンポジウムの中では、「先住民女性の自己表象」が西洋・白人中心の価値観とは異なる論理で、アイデンティティやそれぞれの社会における覇権的文化との抗争や交渉を通じた先住民のエンパワメントと密接に関わっていることを確認した。ハワイからクム・フラとして



「DV Courtの役割」「性的少数者の法的権利」に関するレクチャーシリーズ

フラを实践する研究者、沖縄からも琉球舞踊の師範である表現者を招聘し、舞踊という身体芸術を、既存の制度化された学問的「場」に介在させることにより、言説レベルから学問的実践へと「沖縄ジェンダー学」を語る理論的枠組みをシフトさせることができたことも重要な成果だった。



多人種アジア系アメリカ人アーティストによる  
「チャンプルー精神と“ハバ”のアイデンティティ」

#### 多様な分野との接触による化学反応

国際シンポジウム以外にも、平成25年1月に行った公開シンポジウム「沖縄のこぼれとジェンダー—表象と意識、過去から未来へ—」では、県内外の研究者が、沖縄の「言語」の文法構造、ことわざ、そして社会的言語意識の様態がいかに文化的装置として女性のイメージを言説化し、その言説を社会的価値に転化することによって沖縄女性の固定観念化に加担してきたかということについて検証した。

今年度の多様な取り組みを通して、「沖縄ジェンダー学」という新しい学問の創造には、既存の沖縄学や沖縄研究と言われる分野をジェンダーという視点から再考するだけではなく、一見沖縄とは直接は関係がなさそうな他の異なる地域社会や文化におけるジェンダー意識と接触することによって生じる化合物的な研究成果についても検討していくことが不可欠であることを改めて認識した。レクチャーシリーズでも、沖縄系四世のアメリカ人画家による「沖縄女性」の表象や、水俣という場所を起点に欧米中心のフェミニズムを脱構築していく石牟礼道子の文学など、様々なテーマでこうした化学反応を刺激してくれる優秀な研究者を講師として国内外から招聘することができた。

また、今年度から、サイエンスや医学の分野からも新たに研究分担者が加わり、「沖縄ジェンダー学」をより多角的な視野から考察する試みも開始した。さらに、ドメスティックバイオレンスや性的少数者に対する差別に関する講演など、来年度の重点テーマである「沖縄におけるジェンダーと制度」について考察を深めるうえで有効な布石となる講演も行った。

## 「中期計画プロジェクト」 琉球・沖縄学の研究教育拠点へ

### 人文・社会科学を主体とした 先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の 育成・研究推進プロジェクト

本プロジェクトは当研究所の主要な研究活動（「新しい島嶼学の創造」「沖縄ジェンダー学の創出」）に加えて、本学の中期計画達成プロジェクトとして昨年度から採択され、2年目を迎えた。

本プロジェクトは、琉球・沖縄学を担う若手研究者の育成を主目的とするともに、本研究所の実績を積み重ねて、国内外における琉球・沖縄学の研究教育拠点へと脱皮するためのプロジェクトでもある。さらに、沖縄県内外の教育委員会等と連携することによって、各地域の研究課題の発掘や地域文化の再発見をめざすプロジェクトでもある。

本プロジェクトの主眼である、琉球・沖縄学の次世代研究者（若手研究者）の育成の内容は、特に次の二点に留意して行われている。第一点は、単に若手研究者に研究発表等の機会を与えるということに止まらず、実績を持つ中堅研究者や重鎮の研究者（本学内外を問わず）との交流・討議を重視している。そのことは、若手研究者に対して研究の方向性や的確なアドバイスを期待してのものである。第二点は、人文・社会科学を主体とした琉球・沖縄学という学問領域のより一層の前進を図る上で、特に現地（臨地）調査・フィールドワークの有効性を若手研究者に体得しうるように企画している。



若手研究者セミナー「テキスト研究のフロンティアー奄美・沖縄文献の発掘と新たな読解を旨として」

以上の目的のもとに、本年度の「若手研究者セミナー」「フォーラム」「シンポジウム」は次のように実施された。

①第1回若手研究者セミナー、佐藤万里江（ミシガン大博士課程）「沖縄の食文化、そのひろがり」：6月25日（於琉大）。

②第2回IIOSフォーラム 琉球・沖縄研究講演会、松井健（東大東洋文化研究所）「アジアのなかの沖縄の工芸―焼物を手がかりに考える」：7月7日（於沖縄県立博物館・美術館）。

③第3回：IIOSシンポジウム「〈沖縄学〉を問い直す―過去・現在・未来へ」：8月11日・12日。発表者：波照間永吉（沖縄県立芸大）、安里進（同）、伊從勉（京都大）、粟国恭子（沖縄県立芸大非常勤）、狩俣繁久（琉大）、久万田晋（県立芸大）、泉水英計（神奈川大）、伊佐眞一（近代沖縄史家）、阪井芳貴（名古屋市大）、大城道子（浦添市移民編集専門員）、鳥山淳（沖縄国際大）、納富香織（沖縄国際大南島文化研究所特別研究員）。於県立博物館・美術館。

本シンポジウムは多くの聴衆者の参加と、また地元新聞2社もシンポの内容を詳しく取り上げるなど反響があった。

④第2回若手研究者セミナー、傍士元（南カルフォルニア大）「琉球諸語セミナー 厳密科学としての言語機能学」：8月22日・23日（於琉大）。

⑤第3回若手研究者セミナー「テキスト研究のフロンティアー奄美・沖縄文献の発掘と新たな読解を旨として」：11月24日。於奄美文化センター。山下文武（奄美郷土研究会）、雪田倫代（奄美市教育委員会）、町健次郎（瀬戸内町立図書館・郷土館）、高江洲昌哉（神奈川大兼任講師）、輝広志（南城市文化課）、岩多雅朗（鹿児島まちづくり土地整理協会）。

⑥第4回若手研究者セミナー「琉球諸語セミナー 琉球諸語の記述について考

える」：12月15日・16日（於琉大）。崎原正志（琉大院）、金田章宏（千葉大）、下地理則（九大）、元木環（京大）、下地賀代子（沖縄国際大）、又吉里美（岡山大）、クリスデイビス（琉大）、山田真寛（京大・学振特別研究員）、荻野千砂子（大分大）、小川晋史（国立国語研研究員）、坂井美日（阪大院）、徳永晶子（一橋院）、重野裕美（広島大）。

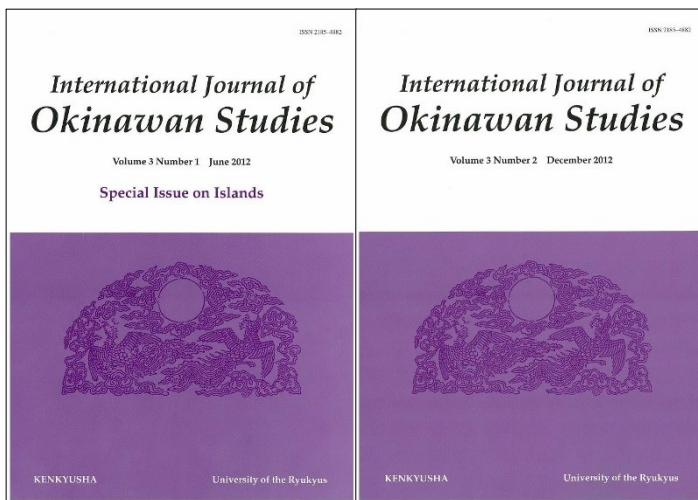
※琉球諸語研究会、沖縄言語研究センターとの共催。

⑦第5回若手研究者セミナー「コンタクトゾーンとしての文学」：12月22日（於県立博物館・美術館）、鈴木智之（法政大）、古堅裕之（沖縄国際大院）、伊野波優美（琉大院）、松下優一（慶応大院）、大城貞俊（琉大）、与那覇恵子（東洋英知女学院大）、喜納育江（琉大）。

※当研究所「沖縄ジェンダー学の創出」プロジェクトとの関連イベント。

## 2012年度研究成果&lt;論文集&gt;

当研究所では、国際学術誌、*IJOS: International Journal of Okinawan Studies*を発行し、沖縄および沖縄に関連する地域の人文科学、社会科学、自然科学等の分野の論文を公募し、査読を経たうえで掲載している。



Volume 3 Number 1 June 2012  
(通巻5号)

***IJOS: International Journal of Okinawan Studies***  
Special Issue on Islands

Guest Editor: Gray Y. Okiihiro (Columbia University)

Editor's Introduction	Gary Y. Okiihiro	1
<hr/>		
<b>Papers</b>		
Islands	Arif Dirlik	3
Space of "Militourism": Intimacies of U.S. and Japanese Empires and Indigenous Sovereignty in Okinawa	Ayano Ginoza	7
Rampaging through the "Pacifist Island": <i>The Rainbow Bird</i> by Medoruma Shun	Masaki Kinjo	25
Island Race	Gary Y. Okiihiro	39
Vanished	Vijay Prashad	43
String of Pearls: The Archipelago of Bases, Military Colonization, and the Making of the American Empire in the Pacific	Mark Selden	45
Sovereignty and Performativity in the Wake of a Crumbling Japanese Empire: Okinawa's All-Island Struggle (1952–1958)	Annmaria Shimabuku	63
Musings on the World-Island	Gayatri Chakravorty Spivak	81
Islands: A Select Bibliography	Ida Girma	83
<hr/>		
Contributors		93
<hr/>		
Submission Guidelines		95
投稿規定		96

Volume 3 Number 2 December 2012  
(通巻6号)

***IJOS: International Journal of Okinawan Studies***

**Papers**

1957年市町村自治法改正過程にみる瀬長那覇市長追放事件	伊 従 勉	1
故郷で客死すること—「中屋幸吉遺稿集 名前よ立って歩け」論	新城 郁夫	23
Geographically-Proximate Postmemory: Sites of War and the Enabling of Vicarious Narration in Medoruma Shun's Fiction	Kyle Ikeda	37
Formation of <i>Munchu</i> by Brothers in Modern Okinawa	Takeshi Tamaki	61

**Book Reviews**

Frank Stewart and Katsunori Yamazato, eds. <i>Living Spirit: Literature and Resurgence in Okinawa</i>	Susan Bouterey	73
深澤 秋人著『近世琉球中国交流史の研究』	山田 浩世	77
梅木 哲人著『近世琉球国の構造』	麻生 伸一	82
塩月 亮子著『沖縄シャーマニズムの近代—聖なる狂気のゆくえ』	浜崎 盛康	87
山田 孝子著『南島の自然誌—変わりゆく人-植物関係』	仲間 勇 栄	92

Submission Guidelines	99
投稿規定	100

紀要『国際琉球沖縄論集』は、当研究所の所員および研究員などの研究成果の発表の場として、同時に質の高い内容をともなった研究となるような成果の公表に寄与するために発行されている。

# 国際琉球沖縄論集

第2号

2013.3.

《琉球大学・ハワイ大学合同シンポジウム》特集  
琉球における言語復興運動とインディジニティ  
—ハワイ語復興との比較から— 親川 志奈子 (01)

Reinterpreting Hawaiian Gender through J.H.K. Knepu'u's Work of Legendary Literature, "He Mo'olelo o Hamanalu," Noenoe Silva (11)

Priestess and Warrior:  
The Picture of Indigenous Okinawa Women in Folklore 知花 愛実 (19)

"Non-natives Need to Strive to be Non-invasive":  
Restoring Kalo and Community in He'eia, Hawai'i Hokulani K. Aikau (27)

Hi'iakaikapoliopole & Pele: Mele and Mo'olelo, Song and Story Leilani Basham (37)

繰り返しがえし—琉球舞踊の精神— 高嶺 久枝 (49)

映像表象における沖縄の「アメラジアン」 野入 直美 (53)

Storied Islands: Imagined Indigeneity as a Strategy for Transforming the Okinawan Community 喜納 育江 (77)

China's Rise and Its Implications for Oceania Terence Wesley-Smith (85)

Japan-Pacific Linkages: A Perspective on Japan's approach to the Pacific aid industry Nanise Young (103)

「新しい島嶼学の創造」の必要性および  
沖縄における自然環境の保全及び適正活用に関する課題 藤田 陽子 (111)

Renewable Energy Policy Development in Hawai'i 梅井 礼 (123)

Present Situation and Prospect of Energy and Environment in Subtropical Archipelagoes 堤 純一郎 (133)

Sustainable Energy as a Means of Promoting Self-reliance for Small Islands: A Comparative Study of Okinawa and Hawai'i David Nguyen (139)

【研究ノート】  
Comparison of Antioxidative Activity among Different Types of *Hibiscus*  
上江洲 榮子・付 楚然・喜屋武 千恵・名護 ちひろ (163)

# 人の移動と21世紀のグローバル社会

「人の移動と21世紀のグローバル社会」は、琉球大学大学院人文社会科学部比較地域文化専攻と当研究所が、海外の大学・研究機関と連携し、2008（平成20）年から2012（平成24）年の5年間にわたって行った共同研究プロジェクトである。

沖縄は有数の移民県として、多くの移民を送り出してきており、琉球大学においてはこのような「人の移動」に関する独自の研究が行われてきた。その蓄積を核として当プロジェクトは進められ、5年の研究期間で全10巻の書籍（2012年度は8巻から10巻）を成果として刊行した。



**VIII**

人の移動、融合、変容の人類史  
沖縄の経験と21世紀への提言

山原昌英 我部政明 山里勝己 赤嶺守

移民、中流交流、越境…  
沖縄を基点に世界を駆け巡った人々のエネルギーは、何を生み出したのか!

移住社

叢書「人の移動と21世紀のグローバル社会」の刊行にあたって  
まえがき 山里勝己 我部政明

**第1部 基調講演**

第1章 人の移動と世界史の形成  
ゲリー・Y・オキヒロ / 山里勝己 訳  
マセル・T・ヒガ 謝必震 / 前田舟子 訳  
我部政明

第2章 ベルギーへの沖縄移民  
第3章 新たな視点に見る中流関係史研究  
提言 情念と理性に支えられる研究を

**第2部 中国・台湾版**

第4章 基隆社寮島の沖縄人ネットワーク (1895-1945)  
朱徳蘭

第5章 中国大陸における中流関係史跡調査と研究  
頼正維 / 前田舟子 訳  
赤嶺守

第6章 中国台湾研究班における連携融合調査研究の成果について  
提言 調査研究を終えての提言  
赤嶺守

**第3部 ハワイ・アメリカ版**

第7章 米国におけるプルトリコ・ディアスポラ  
コロニアル移住かポストコロニアル移住か  
ホルヘ・ドゥアニー / 山原昌英 兼本円・島袋盛世 訳  
・兼本円・島袋盛世 訳  
山原昌英

第8章 人の移動と言語の移動—沖縄とハワイ・米国を中心に  
提言 21世紀のグローバル社会における「人の移動」の研究  
山原昌英

**第4部 タイ・ラオス版**

第9章 タイのヤソトーン県プラチャーコムパークムにおけるプラチャーコム形成のプロセス  
ソムサク・シーサン ティスック / 鈴木規之、ワッチャラー・スヤラー 訳  
ワッチャラー・スヤラー

第10章 タイの若者におけるジャパナイゼーション—大学生の日本のポップカルチャーの受容とライフスタイルの事例から

第11章 越境するタイ・ラオス・カンボジア・琉球  
提言 活動のまとめと今後の課題  
鈴木規之 鈴木規之

**第5部 太平洋・島嶼版**

第12章 「資源再生管理システム」によって島の都市ゴミを土壌改良剤に変える取り組み  
モハメド・ゴラビ、カーク・ジョンソン、藤原健史、伊藤依理 / 廣瀬孝 訳  
渡久地健

第13章 メラネシアの「イモ」と「魚」—食物生産にかんする生態地理学ノート  
梅村哲夫

第14章 島嶼国の経済発展に対するグローバル化の影響と開発政策に関する一考察—フィジー共和国の事例  
提言 グローバリゼーションという荒波を乗り越える個性豊かな島々であれ  
渡久地健

**第6部 移民版**

第15章 在外ブラジル人—新たなディアスポラの生成  
アンジェロ・イシ

第16章 移民研究の連携—資料の収集から活用まで  
森本豊富

第17章 海からチムグルルがやってくる—一定量調査に見るウチナーンチュの越境的コミュニティ  
金城宏幸

提言 ウチナーンチュ大会などが開催される沖縄だからこそ—移民関係資料の収集に力を  
町田宗博

**第7部 若手セッション**

第18章 映画『八月十五夜の茶屋』における人の移動—異文化流入とオキナワ式復興  
名嘉山リサ

第19章 戦後沖縄本島における台湾系華僑—一世の移住過程を中心に  
呉剛君

第20章 琉球人の平瀬島漂着に関する一考察  
提言 若手研究者の視点から  
前田舟子 前田舟子

あとがき 山原昌英  
索引 石原昌英  
執筆者紹介

**IX**

中国と琉球  
人の移動を探る

謝必震 赤嶺守

明清時代を中心とした  
ドラマの構築と研究

明清時代に中国と琉球間は使節が頻りに往来し交流した。当時の進貢・接貢・冊封・官生・漂流・漂着の貴重な記録!

移住社

叢書「人の移動と21世紀のグローバル社会」の刊行にあたって  
まえがき 山里勝己 赤嶺守

**1. 清代琉球進貢使節派遣日程について**  
表1 進貢船会験一覧表  
表2 福建伴送官一覧表  
表3 通過各省伴送官一覧表  
表4 琉球使節北京館舎一覧表  
表5 上表納貢期日一覧表  
表6 水嬉観覧会一覧表  
表7 鴻臚寺演礼一覧表  
表8 鮮魚下賜一覧表  
表9 重華宮筵宴一覧表  
表10 保和殿筵宴一覧表  
表11 皇帝謁見一覧表  
表12 皇帝送迎一覧表  
表13 紫光閣筵宴一覧表  
表14 円明園進貢日程一覧表  
表15 和詩関係一覧表  
表16 文廟参拝一覧表  
表17 下馬宴上馬宴一覧表

陳碩炫

**2. 明代琉球国派遣船一覧表について**  
表1 明代琉球国派遣船一覧表 (1372~1463年)  
表2 明代琉球国派遣船一覧表 (1463~1649年)  
表3 明代朝貢物別表 (1425~1646年)

山田浩世

**3. 明清時代渡唐人員表および清代接貢船・冊送船等派遣日程表について**  
富田千夏

表1 明代渡唐人員表、清代渡唐人員表  
表2 清代接貢船派遣日程  
表3 清代冊送船等派遣日程

**4. 明清時代の琉球官生派遣年表について**  
表1 明代琉球官生派遣年表  
表2 清代琉球官生派遣年表  
前田舟子

**5. 明清時代における琉球民間船の中国漂着について**  
表1 明代琉球民間船漂着一覧 (渡辺美季)  
表2 清代琉球民間船漂着一覧 (渡辺美季・劉序楓・赤嶺守)  
表3 清代琉球漂着民売品一覧表 (赤嶺守)  
赤嶺守

**6. 「中国人・朝鮮人・出所不明の異国人」漂着民の処置をめぐって**  
表1 中国人・朝鮮人・出所不明の異国人漂着一覧  
渡辺美季

**7. 琉球国王の冊封と関連資料について**  
表1 冊封使渡唐年表 (赤嶺守・童宏民)  
表2 琉球琉球録本一覧表 (童宏民)  
表3 「道光十八年戌冠船方諸帳」(商家文書128号) (山田浩世)  
表4 「同治五年丙寅冠船方諸帳」(商家文書252号) (山田浩世)  
赤嶺守

**8. 中流関係史研究の動向と展望—史料の発掘と研究**  
赤嶺守

**9. 中文文献目録**  
**10. 日本文献目録**  
あとがき 赤嶺守  
執筆者紹介

**X**

躍動する  
沖縄系移民

宮内城久光 幸博 町田宗博

ブラジル、ハワイを中心に

ブラジルに18万人、  
ハワイには5万人の海外の「ウチナーンチュ」がいる!

今なぜ彼らは元気なのか、その知られざる歴史と実態を追究!

移住社

**第7章 サンパウロ市における沖縄系人の四十九日のミサ**  
—ブラジルにおける沖縄の民間信仰の継承の一事例について  
浜崎盛康

**第8章 ブラジルの石敢当**  
—沖縄出身者の魔除け  
山里純一

**第9章 ハワイのユタ**  
—沖縄のカミガミと異郷のカミガミ  
浜崎盛康

**第10章 ハワイに送られた捕虜たち**  
—新聞二紙に見られる捕虜関係記事紹介  
仲程昌徳

**終章フォーラム「海外日系紙記者のみた移民社会」**  
—第5回世界のウチナーンチュ大会開催期間の中で  
前原信一 / 仲嶺和男 / 崎原朝一 / 深沢正雪 / バネッサ知念 / 町田宗博

あとがき 金城宏幸  
索引 金城宏幸  
執筆者紹介

**第7章 サンパウロ市における沖縄系人の四十九日のミサ**  
—ブラジルにおける沖縄の民間信仰の継承の一事例について  
浜崎盛康

**第8章 ブラジルの石敢当**  
—沖縄出身者の魔除け  
山里純一

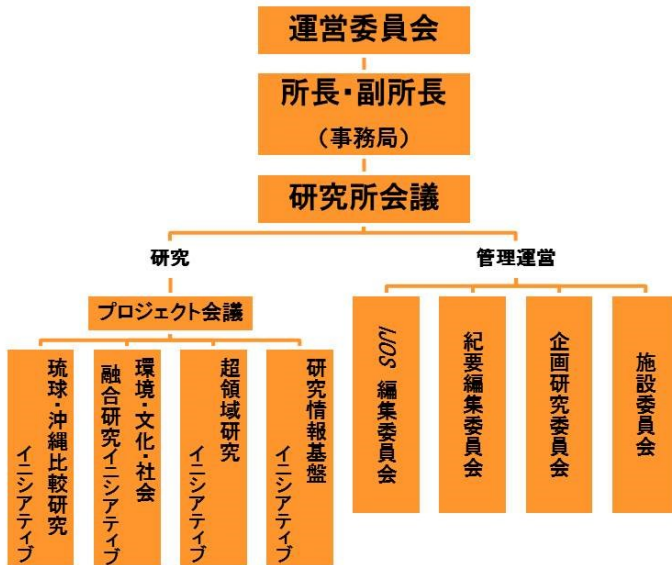
**第9章 ハワイのユタ**  
—沖縄のカミガミと異郷のカミガミ  
浜崎盛康

**第10章 ハワイに送られた捕虜たち**  
—新聞二紙に見られる捕虜関係記事紹介  
仲程昌徳

**終章フォーラム「海外日系紙記者のみた移民社会」**  
—第5回世界のウチナーンチュ大会開催期間の中で  
前原信一 / 仲嶺和男 / 崎原朝一 / 深沢正雪 / バネッサ知念 / 町田宗博

あとがき 金城宏幸  
索引 金城宏幸  
執筆者紹介

## 2012年度 国際沖縄研究所 組織図



## 運営委員会委員一覧

	氏名	所属部局	職名
1号委員 委員長	我部 政明	国際沖縄研究所(併)	研究所長
2号委員	豊見山 和行	国際沖縄研究所(併)	副研究所長
3号委員	喜納 育江	国際沖縄研究所	専任教員・教授
3号委員	藤田 陽子	国際沖縄研究所	専任教員・教授
4号委員	宮平 勝行	法文学部	教授
"	片岡 淳	教育学部	教授
"	池田 譲	理学部	教授
"	當間 孝子	医学部	教授
"	宮城 隼夫	工学部	教授
"	仲間 勇栄	農学部	教授

## I/OIS 編集委員会

	氏名	所属部局
編集長	狩俣 繁久	法文学部
編集委員	喜納 育江	国際沖縄研究所
"	Timothy Kelly Hove	外国語センター
"	豊見山 和行	教育学部
"	山城 新	教育学部

## 紀要編集委員会

	氏名	所属部局
編集長	石原 昌英	法文学部
編集委員	狩俣 繁久	法文学部
"	藤田 陽子	国際沖縄研究所
"	宮内 久光	法文学部

## 教員リスト

	名前	所属	研究分野
所長(併)	我部 政明	法文学部	国際関係論
副所長(併)	豊見山 和行	教育学部	琉球史、アジア海域史
専任	喜納 育江	国際沖縄研究所	アメリカ文学、ジェンダー研究
専任	藤田 陽子	国際沖縄研究所	環境経済学
併任	赤嶺 政信	法文学部	民俗学
併任	赤嶺 守	法文学部	中琉関係史
併任	安藤 徹哉	工学部	都市計画、地域計画
併任	池田 栄史	法文学部	考古学
併任	石原 昌英	法文学部	言語政策、社会言語学
併任	上江洲 榮子	教育学部	栄養生理学
併任	大島 順子	観光産業科学部	環境教育、ESD
併任	大城 学	法文学部	琉球芸能
併任	大湾 知子	医学部	成人看護学 I (感染看護学、尿失禁看護学)
併任	瀬口 浩一	法文学部	財政学、金融論(財政学、地方財政、地域・都市経済)
併任	狩俣 繁久	法文学部	日本語学、琉球語学
併任	漢那 洋子	理学部	光化学・有機物理化学、科学教育
併任	金城 宏幸	法文学部	外国語教育、言語社会学
併任	Kelly Timothy Hove	外国語センター	言語学
併任	越野 泰成	法文学部	理論経済学、応用経済学(法と経済学、公共経済学、応用ミクロ経済学)
併任	白井 こころ	法文学部	公衆衛生学、老年学
併任	鈴木 規之	法文学部	国際社会学
併任	砂川 元	医学部 附属病院	外科系歯学
併任	高良 鉄美	大学院 法務研究科	憲法学、比較憲法学
併任	渡久地 健	法文学部	生態地理学、サンゴ礁文化論
併任	等々力 英美	大学院 医学研究科	疫学、公衆衛生学
併任	野入 直美	法文学部	多文化教育、ライフヒストリー
併任	廣瀬 孝	法文学部	自然地理学、水文地形学
併任	古川 卓	保健管理センター	臨床心理学
併任	前門 晃	法文学部	地形学、自然地理学、岩石制約論
併任	町田 宗博	法文学部	人文地理学
併任	宮内 久光	法文学部	人文地理学、島嶼の地理学
併任	本村 真	法文学部	児童福祉、トラウマ理論
併任	矢野 恵美	大学院 法務研究科	刑事法、被害者学、北政法
併任	山城 新	法文学部	アメリカ文学、環境思想史

## 国際沖縄研究所規則および規定

琉球大学国際沖縄研究所規則

(平成21年4月1日 制定)

### (趣旨)

第1条 この規則は、琉球大学学則第5条の3第2項の規定に基づき、琉球大学国際沖縄研究所(以下「研究所」という。)に関し、必要な事項を定める。

### (目的)

第2条 研究所は、沖縄及び沖縄に関連する分野の研究と研究プロジェクトを推進し、国際的な研究拠点として、沖縄に関する相互理解に貢献することを目的とする。

### (業務)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる業務を行う。  
 (1) 共同研究プロジェクトの企画・立案及び推進に関すること。  
 (2) 国際的、総合的、学際的及び文理融合型の研究プロジェクトの推進に関すること。  
 (3) 社会連携、社会貢献に関する研究プロジェクトの推進に関すること。  
 (4) 国内外の研究機関等との共同研究及び研究交流の推進に関すること。  
 (5) その他研究所の目的を達成するための必要な業務  
 2 前項の研究プロジェクトは、学問的、社会的、地域的な必要性に応じて、不断に見直しを行う。

### (職員)

第4条 研究所に次の職員を置く。  
 (1) 研究所長  
 (2) 副研究所長  
 (3) 研究所の専任教員  
 (4) その他必要な職員  
 2 前項に掲げる者のほか、研究所に客員研究員及び協力研究員(外国人を含む。)を置くことができる。

### (研究所長及び副研究所長)

第5条 研究所長は、研究所の業務を掌理する。  
 2 研究所長は、「施設等の長の選考に関する甲合せ」(平成18年2月20日役員会決定)に基づき、学長が指名する。  
 3 副研究所長は、研究所長を補佐する。  
 4 副研究所長は、本学の教授又は准教授のうちから研究所長の推薦に基づき学長が任命する。  
 5 研究所長及び副研究所長の任期は、2年とし、再任を妨げない。  
 6 研究所長が欠けたときは、次の研究所長が任命されるまで、副研究所長が代行する。

### (運営委員会)

第6条 研究所に、研究所の管理運営に関する重要事項を審議するため、研究所運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。  
 2 運営委員会の組織及び運営については、別に定める。

### (併任教員)

第7条 研究所は、第3条の業務を行うため併任教員を置くことができる。  
 2 併任教員は、本学の教授、准教授又は講師のうちから研究所長の推薦に基づき学長が任命する。  
 3 併任教員の任期は、任命された日から当該年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

### (研究所会議)

第8条 研究所に、専門的な研究事項を協議するため、研究所会議を置く。  
 2 研究所会議の組織及び運営については、別に定める。

### (庶務)

第9条 研究所の庶務は、学術国際部研究協力課において処理する。

### (雑則)

第10条 この規則に定めるもののほか、研究所の運営に関し必要な事項は、学長の承認を得て、研究所長が別に定める。

### (改廃)

第11条 この規則の改廃は、教育研究評議会の議を経て学長が行う。

### 附 則

1 この規則は、平成21年4月1日から施行する。  
 2 琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター規則(平成14年1月22日制定)、琉球大学アメリカ研究センター規則(平成14年10月22日制定)、琉球大学移民研究センター規則(平成15年11月4日制定)琉球大学法文学部附属アジア研究施設規程(平成6年1月19日制定)は、廃止する。  
 附 則(平成23年4月26日)  
 1 この規則は、平成23年4月26日から施行し、平成23年4月1日から適用する。  
 2 この規則の施行日前に、現に併任教員である者及び改正後の第7条第2項の規定により最初に任命された併任教員の任期は、改正後の第7条第3項の規定にかかわらず、平成24年3月31日までとする。  
 附 則(平成24年6月26日)  
 この規則は、平成24年7月1日から施行する。  
 附 則(平成25年3月26日)  
 この規則は、平成25年4月1日から施行する。

琉球大学国際沖縄研究所運営委員会規程

(平成21年4月1日制定)

### (趣旨)

第1条 この規程は、琉球大学国際沖縄研究所(以下「研究所」という。)規則第6条第2項の規定に基づき、琉球大学国際沖縄研究所運営委員会(以下「運営委員会」という。)の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

### (審議事項)

第2条 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。  
 研究所の管理運営に関すること。  
 研究所の事業計画に関すること。  
 研究所の教員人事(教員選考に係る部分を除く。)に関すること。  
 その他研究所に関する事項

### (組織)

第3条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。  
 研究所長  
 副研究所長  
 研究所の専任教員  
 各学部(ただし、観光産業科学部は除く。)から選出された教員各1人  
 学外の学識経験者のうちから研究所長の推薦に基づき学長が委嘱する者若干人  
 2 前項第5号の委員は、学長が任命する。

### (任期)

第4条 前条第1項第4号及び第5号に規定する委員の任期は2年とし、再任を妨げない。  
 2 前項の委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長)

第5条 運営委員会に委員長を置き、第3条第1項第1号に規定する委員をもって充てる。  
 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。  
 3 委員長に事故があるとき又は欠けたときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代行する。

### (会議)

第6条 運営委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。  
 2 議決を要する事項については、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

### (意見の聴取)

第7条 運営委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

### (専門委員会)

第8条 運営委員会に、専門事項を審議するため、専門委員会を置くことができる。

### (庶務)

第9条 運営委員会の庶務は、学術国際部研究協力課において処理する。

### (雑則)

第10条 この規程に定めるもののほか、運営委員会に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て研究所長が別に定める。

### (改廃)

第11条 この規程の改廃は、運営委員会の議を経て学長が行う。

### 附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。  
 附 則(平成23年3月29日)  
 1 この規程は、平成23年3月29日から施行し、平成23年4月1日から適用する。  
 2 この規程の施行日前に、運営委員会規程第3条第1項の規定に基づき任命された委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

*International Institute for Okinawan Studies*  
 琉球大学 国際沖縄研究所

Address: 1 Senbaru, Nishihara, Okinawa 903-0213 JAPAN

住所: 〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地

TEL: 098-895-8475 FAX: 098-895-8308

E-mail: iios@w3.u-ryukyu.ac.jp

http://www.iios.u-ryukyu.ac.jp